

礼拝

令和7年1月27日
6号



大島忌

～感謝の誠と捧げましょう～

大島先生は明治四年（一八七一年）三月十五日、愛知県知多郡でお生まれになり、九歳の時に貞照院でいよいよ出家された。戒律の厳しいお寺であったが、全てのことに堪え忍び修行を積まれた。大島先生はこの修行生活を通して質素儉約の生き方を学ばれ実践し続けられたのである。

一九〇四年、獅谷佛定（したにぶつじょう）上人を中心に坂根弥兵衛らを代表として因幡薬師に「私立高等家政女子校」を開学した。建学の精神である「仏教を基盤とした道徳教育」や熱心な指導が評価され生徒数が急増したため、校舎の増改築が必要となった。しかし資金面

で見通しが立たず閉校が決定した。そんな中、「本校の教育の不十分さが原因で閉校するなら諦めもつくが、学校の真価が認められ、本校を信頼して入学した生徒たちを別の理由で犠牲にはできない」との思いから、寄付金が集められたが、校舎の改築には不十分であった。その頃、主幹となった大島先生も資金調達に当たり、学校関係者の協力とあわせて、廃校の危機を回避し大雲院への移転をも成し遂げた。

一九三〇年、大島先生は第三代校長に就任された。校訓として清純貞淑・感謝勤労・敬上慈下・天物尊重を掲げ、毎週の全校集会で訓話を行い、また生徒による自治を徹底した。この頃にはさらに生徒数も増え、校舎増改築等の課題が山積していた。これを解決すべく、現在の岡崎円勝寺町が選ばれたが、土地購入や校舎建設等の費用総額七十五万円（約十五億円）をいかに集めるか、大島先生を除いて誰もが見通せない状況であった。そんな中、一九三四年九月、鉄筋コンクリートの本館（二重）が見事に完成し竣工を迎えた。時を同じくして、大島先生は東京の大本山増上寺の法主に就任され、月の半分を本校、残り半分を増上寺という二重生活を始められた。その激務もあり一九四五年一月二四日、本館の居室で、七十五歳の生涯を閉じられたのでした。

大島先生は大雲院移転のとき、既に再移転の必要性や資金繰りの困難を予測し、今度は独力でやらねばならないという覚悟を持たれた。「一私立学校の校長が一念独力で集めるには、七十五万円という額は冷嘲を買うに充分な数字であったが、家政女学校の地鎮祭挙行は確に行われた」と新聞で報じられた。大島先生は十六年間で人知れず費用を蓄えるという、奇跡的で不思議な取り組みを実現した。その内訳は「お布施の五十銭から多いものでも五百円を超えない」というように、いかに零細の寄付が数多く集まったか思い知らされる。教え子が亡くなったと言えはその母は集まった香典を持参し、卒業生が結婚すれば記念の寄付があり、既に母となった卒業生は「お金がないのでせめて労力を差し上げたい、何なりと用事を言いつけてください」と、背に子どもを負い手には子どもの手を引き大島校長を訪れた。岡崎キャンパス設立にはこうした涙ぐましいお話が数多く織り込まれており、大島先生の人となり、そしてそれ故の偉業を物語っている。遷化されるまでの三十四年間、二度にわたり本校の危機を救い、維持存続・隆盛へと発展させた功績、そして、総合学園としての今日の基礎を確立された功績は、まさしく学園中興の祖であり、その大恩に感謝の真を捧げたいと思います。